

タイトル：2019年度 教育セミナー（第15回）

日時：2019年9月19日（木）～22日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「17世紀のイスタンブルにおけるユダヤ教徒の社会活動・経済活動」

岡本 多久実（中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士前期課程2年）

今年の9月、私は東京外国語大学にあるアジア・アフリカ言語文化研究所で開催された、中東☆イスラーム教育セミナーに参加した。昨年に引き続き二回目の参加であったが、今回のセミナーも、自分にとってとても勉強になる催しだった。

今回参加してよかったと感じたことの一つは、前回参加したときと同じく、自分と同じ、若しくは似た分野の研究に携わる、様々な人たちと交流ができたことだ。

私は普段の大学院での生活においては、自分の学校の中だけで活動することが多く、他の学校に勤めている研究者と関わる機会は少なかった。また自分の学校では、同年代や下級生でイスラーム史を研究している院生は一人もいないため、同年代の人と研究内容を話し合うこともなかなかできなかった。

しかし今回のセミナーでは、複数の研究者や院生と出会うことができた。セミナー内で行われた講義においては、イスラーム史はもちろん、政治学や文学といった、自分が普段関わらない分野の研究者から話を聞くことができ、知識の裾野を広げることができた。また、セミナーには同世代の大学院生も多数参加していた。彼らの発表を聞いたり、休憩時間などの間に会話をしたりすることを通して、お互いの研究状況を共有し、交友関係を結ぶこともできた。このように本セミナーを通じて、普段の生活ではなかなか作ることができない、学外の人とのつながりを築くことができたのである。

参加してよかったことのもう一つは、自分の研究に関して発表する機会を得られたことである。

これまで私は大学院の生活において、論文や史料の講読を主に行っていた。その反面、自分の研究に関して学外で発表をするという経験をしたことはなかった。そのため、どこかの機会に発表をしなければ、という意識は以前から抱いていた。しかし、大規模な学術学会で発表ができるほどの準備も自信もなかったため、今までは学外発表をすることができないままだった。

そんな自分にとって、博士前期課程の大学院生が発表を行うことのできる本セミナーは、願ってもない機会だった。前回においては、私はポスター発表しか行っていない。そのため今回の研究発表は、自分にとって初めての経験であった。

個人的な感想としては、自分の発表は拙いものだった。しかし、出席された先生方や大学院生から発表で分かりづらかった点や、論理の飛躍がみられた点などを指摘してもらえたことで、自分の研究の問題点がどこにあるのかを気付くことができた。また、発表後には先

生方から、研究に利用する史料や論文に関する助言ももらうことができた。至らない点も多かったが、この発表を通して、今後の研究につながる多くのアドバイスを得ることができたのである。

このように本セミナーでは、自分の研究の参考になる、様々な経験をすることができた。今回の経験を活かしつつ、今後の研究活動、そして修士論文の作成を進めていこうと思う。

最後になりましたが、発表の司会をしてくださった高松洋一先生、また研究に関して意見をくださった先生方や大学院生の皆さん、書類の提出などに関して迷惑をかけた事務局の千葉淑子様、そして今回のセミナーを企画して下さったすべての人に、深く感謝します。ありがとうございました。